

がどう云ふ風な消長を以て進んで行くかと云ふ事は、極めて興味ある問題であります。私は此の圖の説明文を紹介して此の稿を止め、更に之を誘因

として此の意味の小篇を草する機會を作りたいと思ひます。

書架より

紹介子

リズムの話 (Lee "Play in Education.")

韻と理性

幼稚園時期に於ける幼兒にあつては、その遊戲を行ふ場合は無論のこと、其他の殆んど如何なる場合に於ても、その動作は大抵リズム的である。尤もリズム的な遊戲といふものは、此の時期になつて始めて現れるものでなく、その以前とても、リズムの感覺は手足の運動又は發聲の最初の形式等によつて表現されるのである。此の時代の幼兒は唱歌、舞踏、詩歌等に分化せざる前の「所謂全

體のリズム」によつてその動作を支配されて居るのである。

凡そ韻と理性とはものを考へる二形式である。而して韻のみがひとり何にも伴はれずに現れる時これに應せんとする本能がリズムである。而して幼兒に於ては最初リズムのみが現れる。されば幼兒が無意味なアアアアを韻律的に繰返すのは、その内的世界の表現を試みて居るのである。故にこのアアアアといふ發聲に對しては矢張同じ様にアアアアと言つて答へてやるべきである。幼兒に對して故意に譯の分らぬことを

言ふのはよろしくないが、このリズム的な發聲に對しては答へてやる必要がある。幼兒はそれによつて自己の努力が他人に注意され認めらるゝことを知るのである。斯くて幼兒は益々發聲の興味を感じ言語を學ぶ努力に導かれ易いのである。幼兒が片言交りに話をするやうになつて後相手になつてやるのでは、幼兒の發達を幾分遅れしめるのである。

幼稚園時代の幼兒の口誦む歌は、畢竟この無意味の發聲に次ぐべきものであるから、歌詞には左までの注意が拂はれなくてもよいので、ある變化に富んだ節まはしの面白いもので、幼兒の心に何時までも残り、その後の同化作用の手段とならべきものであることが必要である。即ち、この時代に歌はれる歌は幼兒にリズムの世界の自由を與へることがその主なる目的である。

リズムと運動

幼稚園時代のリズムの衝動の特別な現れは搖動である。服初は父の膝がこの目的のために利用せられるけれども、間もなく綱と板とで出來て居る一層便利な器具が使用せらるゝに至るのである。幼兒は一般に鞦韆を甚だしく好むもので、打捨て置けば何時までも鞦韆を離れないのである。何故幼兒が斯くまでに鞦韆に惹附けらるゝかは説明することが困難である。その原因の一部として或る幼兒に對しては鞦韆の急速なる運動が想像の刺激となるのであるかも知れない。けれども他の多くの遊戯に於て然る如く、急速な運動そのものが幼兒に取つて既に大なる魅力であることは疑ひを容れぬ所である。幼兒は又鞦韆から飛び下りることによつてメロドラマ式の興味を得て喜ぶのである。併乍以上の諸原因もさることながら、幼兒鞦韆に對する興味は彼等のリズムの感覺の満足が主となつて居るのではあるまいか。何故ならば鞦韆は幼兒のリズムの衝動を最も具合のよい特殊の

形式に於て充たして呉れるからである。それ故に幼児は没頭的前後不覺的に鞦韆に耽るのである。幼児をして鞦韆に興味を持たしめる交代的リズムは人の一生を通じて種々なる形を取つて現れるのである。

運動の交代に魅力の存すると同じやうに音響の對偶にも魅力が存するのである。讚美歌はそのアンチフォニーの中に朝と夕、晝と夜、浪の進退等の永遠のリズムが含まれて居るために非常に美しいものとなつて居るのである。

搖動其他交代的リズムの形式に依るものが何故吾人に安靜や満足齎すかは不明であるが、多分それは人間生活の不可避的のリズムに應ずる爲めであらう。リズムは吾人を作る動機の一つである。而して吾人の身體の中に存在し活動するものである。勞働と休息、飽食と飢餓、生と死等が何故交代せねばならぬかには生理的の理由が存するのであるが、精神的に言つて人間は韻律的の動物

であるからとも言はれるのである。自然はその他のすべての仕事と一致させるために人間をも韻律的ならしめたのである。若しリズムの本能が人に與へられなかつたならば、人は藝術家たり得なかつたであらうし、又藝術鑑賞家ともなり得なかつたであらう。

リズムの本質は常に運動の感覺の中に存する。人は足に於て感ずる時始めて作家の意を十分に解し得るのである。即ち、舞踏はすべての藝術の父であつて、すべての藝術の中には舞踏的要素が存するといつてよいのである。シヨバンは彼の作曲のあるもの、インスピレーションを舞踏から獲來つて居る。中にも音楽は解剖學の制限なき舞踏である。詩歌に於て、又部分的には建築に於て、吾人の心に訴ふる所のものは運動の記憶である。吾人に觸るゝすべてのものは吾人を動かすものと言つても同じであるがは運動若しくはその變形物である、而してリズムは吾人にとつて運動の聲である。

すなはち藝術は如何なる形式を取つて現れてもその中に常に舞踏の妖精を藏して居るといへるのである。

リズムと催眠

リズムの目的は藝術によつて盡きるものではない。藝術はリズムの副産物に過ぎないのである。リズムの本能は自然の仕事に實際的の貢献を爲すのである。歩行、疾走、漕舟、物懶き手仕事等、すべて反覆を事とする行爲を調整するに當つて、リズムの用は實に廣大なものである。リズムは行爲の連續を一つの行爲に化せしめることによつて、精神的努力の經濟を行ふばかりでなく、その行爲に特殊の力を附與するのである。

凡て反覆的の行爲は行爲者をして一種の歌を唱はしめるに至る者である。單調な仕事に従事する人々は、常に歌を唱ふか心の内で調子を取るかして居る者である。而して唱歌若しくは運動のリズ

ムは吾人の感性を鈍らせる。リズムは鋭い感性を眼らしめ、高尚な機制を保留して爾餘の機械をして不要の疲勞を感せしめず働かしめるのである。

リズムと社會

リズムは時の經過を知らしめないと共に一方又時を作るのである。尤もリズムが時の實質そのものとなり得ないことは無論であるが、茲ではリズムが時を堅實に把握する手段となり得ることを意味して居るのである。リズムは時に厚さと重さと整齊とを與へ、吾人をして認識し得べき部分を持つて或物として、時を取扱ふことを得しめるのである。音律、曲調は定つたリズムの名である。而してリズムは吾人の感情に具體的の意義を持つて居る唯一の時の量である。リズムのみが相等しきことを直ちに認めしむるところの時の單位を與へる。吾人はこれにより時の間に區劃を設け來るべき次のリズムを豫想する事が出来る。韻律的遊戯

によつて得られた時の單位の熟知に助けられる所のリズムの感覺の關聯した一種重要な實際的の機能がある。それは身體的運動のアクセント殊にハヅミを利用する運動のアクセントを知る機能である。このアクセントは熟練の結果知り得られるのであつて何事を行ふにもこのアクセントは必要である。アクセントを知つて居れば何處に力を入れるべきかに就て豫め用意をする事が出来るのである。幼兒の歩行練習も同様の知識を得る事にしてその大部分が存するといふ事は賭易き道理である。社會力もリズムによつて動き層々積んでクライマックスに達するのであつて、このリズムを巧みに利用する人が運動の中心となり得る人である。共同動作を行ふ場合にはリズムは無くてはならぬものである、況してその動作が反覆的のものである場合にはリズムは一層必要となつて來るのである、何故ならばリズムは各個人を精神的に結合するからである。リズムは各個人の心意と氣質と

を溶解してその望むまゝの一體と變化させる所の社會的科學者である。

共同の意志及び意識のために自己の個性を没却しやうとする時、人々は何時も奇蹟を演じ得る力として本能的に一つの大きなリズムに歸するのである。軍歌や戦争舞踏は國民をして個人主義を棄てしめ一意君國のためにその身を捧げしめるのである。この故にすべての團體にはその團體の歌があるのである。國歌を始めとして市歌、校歌、會歌等はすべてこの目的のために作られたものに外ならぬのである。

希臘人はリズムの種々の形の上に其教育の基礎を置き、文藝復興期の伊太利人は希臘羅馬の先覺に倣つてリズムに多大の注意を拂つたのである。

獨逸の堅實なる國民性がシラーの詩とベトーベンのシンフォニーとに依つて養はれ來つたことを知るものは教育上に於けるリズムの價值に就て疑ひを挾まぬのである。